

次の段階へ ジャンプ！

ニュースの内容

- 1 協議会次の段階へ
- 2 H28年度事業内容
- 3 生物多様性保全促進事業
- 4 県大学連携リーグ研究

■H28年4月18日：市役所において平成28年度の第1回協議会開催
地元の意見をもっと多く聞く必要から、北潟地区の区長・副区長が委員として加わりました。

- ・会長 青海忠久（県立大名誉教授） 副会長 組頭五十夫（日本野鳥の会）
- ・委員 ・浅田能成 ・河田勝治 ・丸谷浩二 ・伊藤和弘 ・関 法子
・辻下義雄 ・長谷川吉弘 ・小練 実 ・富田藤一郎 ・北浦博憲
・加藤利夫 ・見澤啓子 ・佐孝百合子 ・古橋照夫 ・竹内輔常
・田嶋直和 ・松村俊幸 ・西垣正男 ・（大南新一）
- ・研究協力 ・福井県立大学 ・福井高専 ・県里山里海湖研究所
・県自然保護センター
- ・事務局 あわら市生活環境課

■H28年度事業計画

- 1: 第2回北潟湖フォーラム開催（9月25日（日）於：芦原青年の家）
 - ・午前：自然体験4コース（カヌー、遊覧、魚・ミサゴ、サイクリングP）
 - ・午後：講演「自然とともにある暮らし」洪澤 壽一氏（共存の森NW理事長）
報告1：「汽水湖 北潟湖の水質の特性について」奥村充司氏（福井高専）
報告2：「北潟湖の近年の魚種組成について」富永 修氏（福井県立大）
 - ・コーディネーター：吉田 丈人氏（東京大学）
 - ・ポスターセッション（湖に関係する多くの団体が展示します。）

詳細は案内チラシを参照してください。

2: 北潟湖周辺域生物多様性保全促進事業（環境省交付金）

●概要：専門家の協力を得て、北潟湖の貴重で豊かな生物相のうち、特に重要な内水面漁業に有用な魚種及び、絶滅の恐れが高く対策の緊急性の高い種を保全するための科学的な知見を得る調査を実施し、情報共有を図り、北潟湖の豊かな自然の価値の理解と保全に対する意識の醸成を図る。（計画書より一部抜粋）

●個別の事業

- ①鳥類生息調査（自然再生計画に向けたデータ収集）
- ②動植物生息状況調査（自然再生計画に向けたデータ収集）
- ③魚介類調査（内水面漁業に有用な魚種の把握）：
- ④生息環境整備（希少な藻類保全のため外来種の刈り取り等）
- ⑤外来種対策（侵略的外来生物のウシガエル等の適正な防除）

<協議内容>議事録より一部抜粋

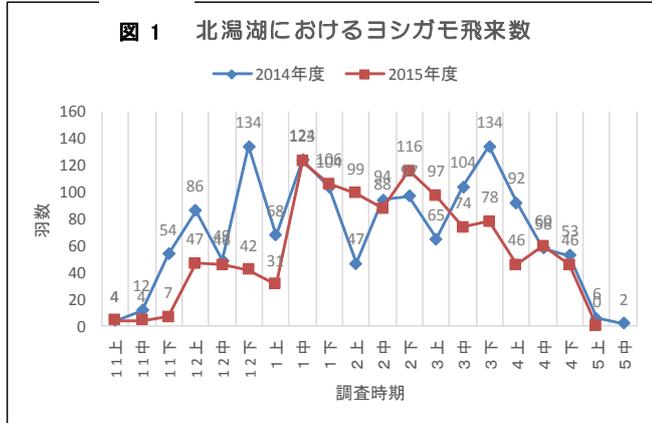
- ・何が「再生」というのか地元もわからない。
- ・塩分で揚水できない、漁業者も減少、北潟湖の抱えている問題を科学的なデータを基に考える必要。
- ・行政が中心でなく、地域住民も加わり、議論して決めていくことが大切。
- ・汗を流す人をもっと集めないといけない。・北潟湖だけではなく流域や里山、流入河川も含んでいる。
- ・法定協議会に向けて、科学的なデータを基に「残したい自然のビジョン」を協議会で決めることが目標。

3 最近の研究成果より (H27年度福井県大学連携研究推進事業報告書より概略の紹介)

① 自然再生シンボル種の探索(鳥類)

担当: 組頭五十夫(日本野鳥の会福井県)

●ヨシガモ(県域準絶滅危惧種)を北潟湖自然再生シンボル鳥類最終候補として選定した。



●北潟湖では、ヨシガモは増加傾向にあり、全国集計が15,021羽、中央アジア・東アジアでは推定78,000羽～89,000羽なので、ラムサール条約登録湿地の条件である。1%を超えるには830羽飛来しないとクリアできない。

隣接する加戸大堤では、2016年には最大396羽記録されているので併せて考えていく必要がある。

・ミサゴの安定した繁殖やオジロワシ、オオワシなどが毎年越冬できるような環境保全と、いずれも魚食生の猛禽類なので餌となる魚類の生息数を増やすことも重要である。

② シンボル植物の固定埋土種子探索

担当: 吉岡 俊人(福井県立大学教授)

協力者: 赤井賢成、河田勝治、近藤邦憲、徳丸俊夫、中山裕一(あわら自然を愛する会)

●過去の標本情報や調査データや空中写真の判読及び現地調査の結果から、北潟湖開水面にはシンボルとして適切な植物は生育していないと判断された。そこで、湖底の堆積物を採取した。

●2016年3月の段階では、発芽実生は観察されていない。発芽してきた植物の同定調査を継続する。



採泥器による採泥

③ 開田橋の開門条件の検討

担当: 奥村 充司(福井高専准教授)

●環境基準点を中心に6ヶ所を設定し、濁度、塩分濃度、溶存酸素量を水深方向に測定した。さらに、観音川からの淡水の流入及び湖内での混合拡散の状況の把握をおこなった。

●日の出橋付近では塩水くさびを形成しており、開田橋外側の北潟湖北部と類似のパターンが見られた。日の出橋付近の密度成層が奥部からの栄養塩の流出を抑制している可能性を示唆でき、この形成を抑制する、あるいは、攪乱する方法を検討する必要があることが明らかとなった。

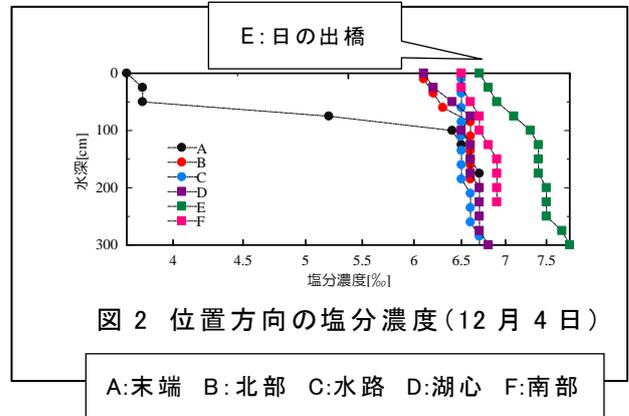


図2 位置方向の塩分濃度(12月4日)

A:末端 B:北部 C:水路 D:湖心 E:南部

・E水深3mで塩分濃度0.78%(グラフは‰表示)
 ・北潟湖は水深が浅いことや集水域からその塩分濃度の分布は降水による希釈や風による影響を受けやすい。

★フォーラム2016では詳しい報告が聞けます。

④ 既往情報から植生の変遷とその要因の把握

担当: 石井 潤(県里山里海湖研究所)

●北潟湖の現在までの植生の変遷を把握することを目的に空中写真の判読により手法を検討し、植生の保全・再生の課題を整理した。

●湿性・抽水植物群落は護岸のコンクリート化に伴い面積が減少していた。現地調査の結果、現在は湿性・抽水植物群落の分布は限定的で、浮葉植物は確認できていない。確認できない原因は未解明であるが、浮葉・沈水植物を含む植生は、周辺地域の水路、休耕田、ため池で保持されており、これらの検討内容を踏まえて再生の可能性を見出した。